

意味論的視点と高大連携による誤用分析に基づく、英語前置詞研究と日英語の相同性研究

花崎, 美紀 / HANAZAKI, Miki

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費助成事業 研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

12

(発行年 / Year)

2020-06-24

令和 2 年 6 月 24 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02761

研究課題名（和文）意味論的視点と高大連携による誤用分析に基づく、英語前置詞研究と日英語の相同性研究

研究課題名（英文）A Semantic Study on English Prepositions and a Homology Study on English and Japanese based on Error Analysis of Data Obtained through Cooperation between High School and University

研究代表者

花崎 美紀（HANAZAKI, MIKI）

法政大学・情報科学部・教授

研究者番号：80345727

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題の研究目的は、一般的に「機能語」と呼ばれる語のうち、きわめて「多義」的に見える前置詞の意味を、各前置詞の意味の「棲み分け」をもとに、また、慣用表現を手がかりに、明らかにし、日英語の相同性（英語は＜有界的・結果志向・スルの＞であり、日本語は＜無界的・経過志向・ナル的＞である）を求める手がかりとすることである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

急速にグローバル化が進むこの世界において、リンガフランカである英語が日常生活に使えるようになることは必須の課題であり、喫緊の課題である。その中において、本研究は、一般的には「意味がない」と思われている語に焦点をあて、その意味論を研究することにより、日本語と英語の様々な違いに共通する「潮流」を見つけ出し、より自然な英語を話す契機を見つけるものである。

研究成果の概要（英文）：This study has conducted a “semantic” research on very “polysemous” prepositions, which are usually regarded mistakenly as “function” words, i.e., void of semantic meanings. The research has analyzed their idiomatic phrases, in order to provide a key to the homology studies on English and Japanese.

研究分野：英語学

キーワード：認知意味論 日英語対称 前置詞 相同性研究

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者が 2009-2011 年、2012-2015 年の科学研究費で従事していた研究の継続課題である。本研究は、以下のような目的・方法を取りながら、すべての前置詞のすみわけを明らかにすることが最終目標であり、課題ごとに対象とする前置詞を広げていっている。よって、目的・方法については、以前の科研課題と同様である。

前置詞の多義研究は、1 語の多義を扱う Semasiological な研究 (例: fruit は果実・結果・・ という意味があるとする研究) に終始している感があるが、本研究は、それに近似義語を扱う Onomasiological な視点 (例: 果実を表す語には fruit・nut・・があるとする視点) を加え、その Onomasiological な意味の重なり of 緊張関係が意味拡張を阻止すると考えている。先行研究の中には、2 語以上を扱う研究もあるが、それらの違いを述べるにとどまり、その違いが意味拡張を制限するといったような「動的」な研究はまだない。

研究代表者は、以前、前置詞の多義を従来の意味論でしばしば行われるように Semasiological な視点で研究してきた。しかし、その一連の研究で、従来のメタファー・メトニミーによって意味拡張を説明しようとする理論は、(1) 意味が際限なく広がることを阻止することはできず、(2) 新しい意味の予測が不可能であることがわかった。そこで、意味拡張は、複数の可能性が緊張関係の中に存在した後、それぞれの語の弁別的意味要素により取捨選択されることを通して行われるという見解、つまり、pragmatic strengthening を中心とした行為理論によって意味「用法」の拡張の可能性を探り、さらに、Onomasiological な視点にたち、近似義語の中心義が意味拡張を制限するという立場をとれば、上述の問題は解決されることに気がついた。さらに、その緊張関係の中で、意味拡張の可能性を阻止されたものは、慣用表現としてのみ存在しようということがわかった。これまで前置詞は、機能語として意味論で語られることはほとんどなく、意味論で語られる場合は、一つの語の多義を記述する研究がほとんどであった。

例えば、for の多義を説明するためには、同じように、2 つのものが空間的に並列されることを表すことのできる with や by との関係のみをみることにより、際限ない意味拡張を防いだ意味記述が可能となる。また、「～の間中」という意味は、by や during を始めとするその他の前置詞によって表される可能性があり、それらが共存する緊張関係にあったと思われるが、繰り返し使われる中で during が選択され、Onomasiologically に意味拡張を阻止された by は by day という慣用表現でのみ存在し続けているといえる。

2. 研究の目的

これまでの前置詞研究は、1 つの語の多義を記述するものがほとんどであった。しかし、研究代表者の一連の研究により、多義の説明には、関連する語との関係を語る事が不可欠であるということが明らかになった。

よって、本研究は、前置詞の中でも、「近接性」を表すすべての前置詞の 棲み分け を明らかにすることを通して、前置詞の多義を研究しようとするものである。

また、英語らしさ・日本語らしさに関する研究は近年、相同性研究(cross-categorical studies)としてまとまりつつあるが、それらの研究が扱う言語事象の多くは文・談話レベルのものである。本研究は、語レベルで、しかも、一般的には「機能語」と呼ばれる語に意義を見だし、それらの語も他レベルと相同的であることを述べようとするものである。

まとめると、本研究は、日英語の相同性研究に語レベルの研究として寄与し、また、エラーアナリシスを通して高大連携と自学自習用教材として結実させることが目的であるといえる。

3. 研究の方法

本研究は、前置詞研究において、Semasiological な視点と Onomasiological な手法を使い、また、Onomasiological な視点は、慣用表現に注目することにより、近似義語の動的な棲み分けを記述する。また、その中には、歴史的研究をも取り入れる。

具体的には、2 段階にわけて研究を行い、3 方法で研究結果を社会に還元する。

第 1 段階として Semasiological な研究を行い、1 語の現代英語における用法を整理しそこから仮の意味ネットワークを作成しそれを古い英語における用法を整理して補強する。

具体的には、対象語の現代英語での用法を、先行研究渉猟結果を参考にしながら整理し、仮の意味ネットワークを作成する。その手順は次(1)～(8)の通りである。なお、古英語期・中英語期・初期近代英語期の英語についても以下の(1)～(7)の作業をし、また、(9)をする。

- (1) 採集したデータを使って、対象語の現代英語での用例を収集する。
- (2) それらの用例を意味に従っていくつかのグループに分類する。
- (3) それぞれのグループのイメージスキーマを作成する。
- (4) イメージスキーマの共通点・相違点を手がかりに、近い用法どうしを結びつける。
- (5) 結果として中心にくる用法を 中心スキーマ と認定する。

- (6) 他の用法とつながらない用法（**孤立用法**）を確認する。
- (7) 「慣用表現」を確認する。
- (8) 高校生の起こしやすい間違いがなぜ起こるかを確認する。
- (9) 過去の用法について、他言語（特にフランス語、北欧語）での用法が影響を与えている可能性について調査する。

第2に、Onomasiological な研究を行い、関連する語を、孤立用法・慣用表現を元に検証し、対象前置詞の棲み分けを明らかにする。言い換えると、Onomasiologically に、関連する語を、孤立用法・慣用表現をもとに検証し、対象前置詞の棲み分けを明らかにする。そして、前置詞の Word Net を構築する。

研究結果の社会への還元は3方法による。すなわち、高大連携の中でその研究結果をもとに、大学生および高校生への正しい前置詞の使い方を指導する。また、モジュール教材（テーマ別の小教材）としてサーバーに蓄積し、ゆとり教育の元で教育されてきて実力にばらつきのある大学生が自学自習できるような教材として提供する。そして、研究結果は報告書として本に結実する。

4．研究成果

本研究は、前述の通り、研究代表者が2009-2011年、2012-2015年の科学研究費で従事していた研究の継続課題である。

本研究の意義・重要性は次の4点である。

<1点目>前置詞をそれらの「棲み分け」を元に研究するという点。これまでの前置詞研究は、1つの語の多義を記述するものがほとんどであったが、本研究は、研究代表者の一連の研究により、多義の説明には、関連する語との関係を語る事が不可欠であるということが明らかになったことを元に、近い意味をもつ前置詞との関係において前置詞を研究している。

<2点目>慣用句こそがその「棲み分け」を表すという、これまでの研究代表者の一連の研究をもとに、慣用句を鍵として研究している点。

<3点目>前置詞研究を相同性研究に応用しようとしている点。日英語の様々な現象が、それぞれの言語ごとに一つの傾向にそっているとする日英語の相同性を求める研究は、従来は、文レベル（受動態など）やそれ以上のレベル（ナラティブの構造など）のものであることが多いのに対して、本研究は、従来より「機能語」の筆頭ともされる前置詞や格助詞にも同じ傾向が見られることを明らかにしようとしている。

<4点目>その研究結果を、大学生の自学自習用教材として活用するとともに、高大連携に生かしていこうとしている点。

本研究の主な成果は、下記に述べる13本の論文、17件の学会発表、2本の著作であり、そしてさらに、サーバー上に多数のモジュール教材を作成した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 12件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 花崎一夫 花崎美紀	4. 巻 13
2. 論文標題 英語前置詞downとunderの意味論 - 効果的な教育方法の試案 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 信州大学総合人間科学研究	6. 最初と最後の頁 2-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Miki HANAZAKI and Kazuo HANAZAKI	4. 巻 -
2. 論文標題 Applying Theory to Practice: Teaching Down and Under to Japanese EFL Students with Modular Materials and through Showing the Differences between English and Japanese	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Proceeding for International Academic Conference in Education, Language and Psychology (IACELP)	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Miki HANAZAKI and Kazuo HANAZAKI	4. 巻 -
2. 論文標題 Words that Seem to Denote "places" in English and Japanese: English Prepositions and Japanese Postpositions	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Proceeding for HUIC 2016	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 花崎一夫、花崎美紀、植木宏、藤澤翔	4. 巻 11
2. 論文標題 大学生の英語科指導における内発的動機付けおよび社会への関心を高め、地域との連携を強める試み：松本子ども留学の中学生との中大連携を通じた内発動機付けと学習支援、および地域連携	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 地域ブランド研究	6. 最初と最後の頁 61-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Miki HANAZAKI and Kazuo HANAZAKI	4. 巻 2018
2. 論文標題 The Semantics of Words that Denote Lower Places or Movements toward such Lower Places	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Proceedings for 11th International Conference on Language, Education, Humanities & Innovation 2018	6. 最初と最後の頁 25-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Miki HANAZAKI and Kazuo HANAZAKI	4. 巻 2017
2. 論文標題 The Semantics of With Revisited	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Proceedings for 23ed ICTEL 2017	6. 最初と最後の頁 24-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花崎美紀	4. 巻 34
2. 論文標題 As、With、分詞構文における同時性と因果性の意味読み込み：英語指導要領を実施するための一提言	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 JELS	6. 最初と最後の頁 17-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花崎美紀、花崎一夫	4. 巻 1
2. 論文標題 英語教職コアカリキュラムである「異文化交流」の実施にむけて英語教職希望者と異文化交流の実態および可能な対応策	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教職実践研究	6. 最初と最後の頁 20-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花崎美紀・花崎一夫・菊池聡・大塚崇史	4. 巻 1
2. 論文標題 高校学習指導要領（外国語編）の中で伸ばすべき能力とされる論理的思考力の伸長要因同定とその測定にむけて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教職実践研究	6. 最初と最後の頁 14-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花崎美紀、中村伸哉	4. 巻 11
2. 論文標題 大学生の英語科指導における内発的動機付けを高め、小学校の外国語活動の課題を克服するための試み：小大連携を通じた内発的動機付けと学習支援、および地域連携	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 地域ブランド研究	6. 最初と最後の頁 27-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花崎美紀、花崎一夫	4. 巻 9
2. 論文標題 日本人EFL（英語第2言語学習者）への効果的な前置詞教授法：前置詞Withを例にして	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 教職研究	6. 最初と最後の頁 23-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤原隆史、花崎一夫、花崎美紀	4. 巻 9
2. 論文標題 認知言語学の知見を活かした英語使役動詞haveの教授法とその教育的効果	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 教職研究	6. 最初と最後の頁 35-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Miki HANAZAKI, Kazuo HANAZAKI, Takafumi Fujiwara	4. 巻 -
2. 論文標題 Teaching English to Japanese EFL Learners Using Phonetics: A Pedagogical Application of the Vowel Triangle	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Proceedings for HUIC International Conference on Humanities	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 10件)

1. 発表者名 Miki HANAZAKI and Kazuo HANAZAKI
2. 発表標題 Applying Theory to Practice: Teaching Down and Under to Japanese EFL Students with Modular Materials and through Showing the Differences between English and Japanese
3. 学会等名 International Academic Conference in Education, Language and Psychology (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Miki HANAZAKI, Kazuo HANAZAKI and Takafumi Fujiwara
2. 発表標題 The Similarities and Differences between English and Japanese
3. 学会等名 HUIC International Conference on Arts and Humanities (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Miki HANAZAKI, Kazuo HANAZAKI, Satoru Kikuchi and Takafumi Fujiwara
2. 発表標題 Corelation between Logical Thinking, English Ability and Pedagogy: Practicing Government Course Guideline
3. 学会等名 MICELT 2016 (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Miki HANAZAKI and Kazuo HANAZAKI
2. 発表標題 The Semantics of Down and Under
3. 学会等名 HUIIC International Conference on Humanities (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Miki HANAZAKI and Kazuo Hanazaki
2. 発表標題 English Lexical Items that Yield the Implicature of Cause and Effect and the Mechanism for the Interlocutors to Understand Such Implicature: Applying Theory to Practice in TESL / TESOL in Japan
3. 学会等名 International Pragmatics Association (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 花崎美紀
2. 発表標題 母音の三角形を使った音声教育の可能性
3. 学会等名 LCW
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 花崎美紀
2. 発表標題 英語力の伸長と論理的思考力の伸長について
3. 学会等名 日本英語学会 第35回ワークショップ
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 菊池聡、花崎美紀、花崎一夫、大塚崇史
2. 発表標題 英語力と論理的思考力伸長の規定因の考察
3. 学会等名 日本英語学会 第35回ワークショップ
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Miki HANAZAKI and Kazuo HANAZAKI
2. 発表標題 Semantics of With Revisited
3. 学会等名 23ed ICTEL (International COnference on Teaching, Education & Learning) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Miki HANAZAKI and Kazuo HANAZAKI
2. 発表標題 The Semantics of Down and Under
3. 学会等名 2018 HUIC Arts, Humanities, Social Science and Education Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 花崎美紀、花崎一夫、他
2. 発表標題 英語教育・国語教育と論理的思考：日英語比較、および過去30年間の国立大学入試問題分析から見る、新指導要領への提言
3. 学会等名 日本社会言語科学界
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Miki HANAZAKI, Kazuo HANAZAKI
2. 発表標題 An Effective Way of Teaching Prepositions to Japanese EFL Learners: A Case Study with With
3. 学会等名 MICOLLAC (International Conference on Literature, Languages, and Cultures (国際学会))
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 花崎美紀
2. 発表標題 As, With, 分詞構文における同時性と因果性の意味読み込み：英語指導要領を実施するための一提言
3. 学会等名 日本英語学会 (招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 花崎美紀、菊池聡、花崎一夫
2. 発表標題 英語力テストのエラーアナリシスと、英語力と論理的思考の相関性：新学習指導要領 (外国語) の実施を見据えて
3. 学会等名 日本英語学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 花崎美紀、花崎一夫
2. 発表標題 同時と因果と譲歩：語用論的強化と意味 (含意) の読み込み
3. 学会等名 日本語用論学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Miki HANAZAKI, Kazuo HANAZAKI, Takafumi FUJIWARA
2. 発表標題 Teaching English to Japanese EFL Learners Using Phonetics: A Pedagogical Application of the Vowel Triangle
3. 学会等名 HUIC International Conference on Humanities (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Miki HANAZAKI, Kazuo HANAZAKI
2. 発表標題 The Semantics of By Revisited:Applying Theory to Practice
3. 学会等名 HUIC International Conference on Humanities (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 花崎一夫 花崎美紀	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ブイツーソリューション	5. 総ページ数 79
3. 書名 コロケーションで学ぶ英会話	

1. 著者名 井上逸兵、大塚崇史、花崎一夫、花崎美紀	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Macmillan Education	5. 総ページ数 83
3. 書名 The Essentials of Paragraph-Writing パラグラフ・ライティングの真髄	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	花崎 一夫 (HANAZAKI Kazuo) (40319009)	信州大学・学術研究院総合人間科学系・准教授 (13601)	